

野次馬根性のゆくえ

熊谷操子

どうにもならない心の苦しみに耐えかねて、社寺を片端から訪ねて、三年前のこと、ある日、枚方市にある日置神社に詣でた。二町歩という神域の広さにびっくりしながら、鳥居の側にある案内板を読んでいた。

祭神は天之御中主神と菅原道真。

惟喬親王が渚の院を中心として交野ヶ原で遊猟し給える時、ご自分の愛鷹の姿が見えなくなったので、日没を惜しんで、しばし日を止め置き給えと、神に祈願したという伝承から日置神社という。

とあった。私はこの神社名の由来を一応は素直に受けとりながらも、祭神が天之御中主神というから太陽祭祀の残映として、もともと日置をヘキと呼んでいたのでは……と思った。理屈はさておき、ご自分の愛する鳥のため、「もう少し暮れないで下さい」と神に祈る温かいお気持ちの惟喬親王とは、さて渚の院とは、と私の野次馬根性が頭をもたげ始めた。微かでもいいから、想像のよすがになりそうな事でも手繰り寄せることが出来たらと、そのときから気の遠くなりそうな詮索が始まった。

惟喬親王。号を小野宮、又は水無瀬宮。

五五代文徳天皇第一皇子（八四四〜八九七）であり、母は従四位下紀静子（三条院）正四位下紀名虎の女である。

親王帯劔年齢。一四歳。

天安元年（八五七）一五歳。

天安二年（八五八）太宰権師に任。

貞観五年（八六三）四品太宰師。彈正尹任。

貞観六年（八六四）四品彈正尹。常陸太守。離京。

貞観九年（八六七）四品彈正尹。常陸尹知故。

貞観一四年（八七二）四品彈正尹上野太处彈正知故。

貞観一四年（八七二）七月、四品守彈正疾頓出家為沙門。

貞観一六年（八七四）九月二一日、清和天皇から、封戸百戸を増給し、衣鉢の費に当てさせる勅が出されている。

親王は承和一一年（八四四）、文徳天皇と紀静子（更衣）との間に生まれた第一皇子であったから、天皇の限らない鐘愛を受けていた。母を同じうする弟は第二子惟喬親王で、第三子惟彦親王の母は滋野貞主の女である。その後、嘉祥三年（八五〇）に天皇と藤原明子との間に、第四皇子の惟仁が生まれる（後の清和天皇）。

皇太子を定めるにあたって、文徳天皇は惟喬親王をこよなく愛していたので、当然皇太子にと当初は思っていたが、惟仁親王の背後に控える良房のことがあって決断出来なかった。古代の皇室では、次の天皇には別に長男でなければならぬという規則はなかった。

立太子をめぐって藤原氏と紀氏との間に当然競争が起こった。文徳天皇の母が藤原良房の妹という関係がある上に、紀氏の勢力は当時の藤原氏とは比べものならぬほど衰え始めていたので、終に勢力がものを言っている惟仁が皇太子に立てられた。生まれて僅か八ヶ月であるのに。この時惟喬は七歳であった。

当時の童謡に、「大枝を超え走超えて、騰がり躍どり超えて、我が護る国にや捜あさり食む志岐や、雄々伊志岐耶」とうたわれたという。大枝は三人の兄をさし、惟仁を勢のある鴨になぞらえ、田んぼの食物もあさり求めとってしまったように、惟仁は三人の兄をこえて皇太子となった、というものである。

当時、紀名虎の一族はどうしても惟喬を立てようとし、僧真濟をして秘法を修して祈祷させ、藤原氏は僧真雅を惟仁の護持僧として祈らせたという話がある。ちなみに僧真濟の姓は紀氏である。

また、藤原良房と紀名虎とが、相撲をとって勝負をつけたとも伝えられている。なんと単純な発想と、私は思わず苦笑した。「平家物語」や「源平盛衰記」にもすさまじい話がある。

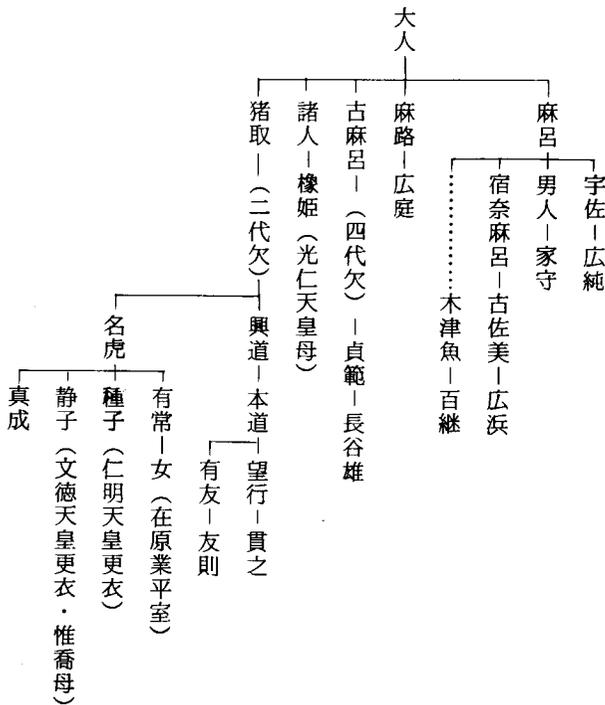
それでも文徳天皇は諦め切れず、この後源信（嵯峨天皇の皇子）に相談している。信は天皇を諫め、惟仁に罪や落ち度がなければ、これを

廃する事が出来ないと奉したので、やっと思いとどまれたという。

外戚の力の差が惟喬の運命をコロッと変えてしまったのだ。

当時の貴族にとって、天皇の外戚となることはこの上もない名譽であった。貞観八年（八六六）摂政となった良房は、人臣摂政の初めての例を作ったのだ。しかし実質的には、文徳天皇の死によって九歳の惟仁が即位して清和天皇となった時点で、もう摂政であったと言っても過言ではなからう（この時、惟喬一五歳）。良房にとっては、政治を行う上に

奈良・平安時代の紀氏略系図（その一）



も何かと便利にもなっただろうから、最高の望みが得られた事になる。

天皇継承筆頭候補にありながら、母方が紀氏であるため、天皇外戚を固めつつあった藤原氏にその運命をはばまれた惟喬の哀しさは、最初から政治的欲望などなかったことにあると思う。赤銅色に跳躍する野心の持ち主などではなく、自然に親しむ優しい人柄であったと私は想像する。

渚の院

藤原氏の思うままになってゆく世の中に無常を感じた惟喬は、水無瀬と渚の院に別業（別荘）を設け、花見に鷹狩にと失意を慰めていた。私はどうしても渚の院跡をこの眼で確かめたくて足を運んだ。京阪電車の御殿山駅で下車して、旧村落の家並に混って新興住宅が群立している道を十分ほど歩くと、渚元町の渚之院会館がある。その裏手の保育所との間の、ごくごく狭い空き地が目指す跡地である。なるほど、渚の院跡と刻んだ八〇センチほどの石碑が立っていた。そして、後世に建った観音寺の鐘楼だけがポツンと残っていた。往時を偲ぶすがは何一つ残っていない。

当時、この院には千本の桜がそれぞれに色を競い、中庭の梅もこよなく美しく、駒止め松などの名木もあったというから、相当豪壮な別業であったと思う。その頃淀川の川巾は現在よりもっともっとと広く、この院の真下まで水があり、往来する船が美しく水尾を見せていたと言う。反対にその淀川から望むと、院の丘に茂る樹々も、えも言われぬ風情を添えていたとか。

陰湿な皇位継承争いに破れた惟喬の気持ちは、この場所で随分救われ

たのではないかしらと、当時の景色を臉の中で描き想像してみた。

承平五年（九三五）、紀貫之が土佐国からの帰途、淀川をさかのぼって帰京した時、この一幅の絵を想わせる渚の院のたたずまいを土佐日記に描写している。当時、建物は残っていたかどうかは分からないが、ずっと後世に観音寺に改めたのだから、荒れてはいても貫之が見た時は、建物の一部ぐらいは残っていたのではないかと私は勝手に想像している。言わば、自分の先祖でもある惟喬の住んだ家という先入観もあり、感



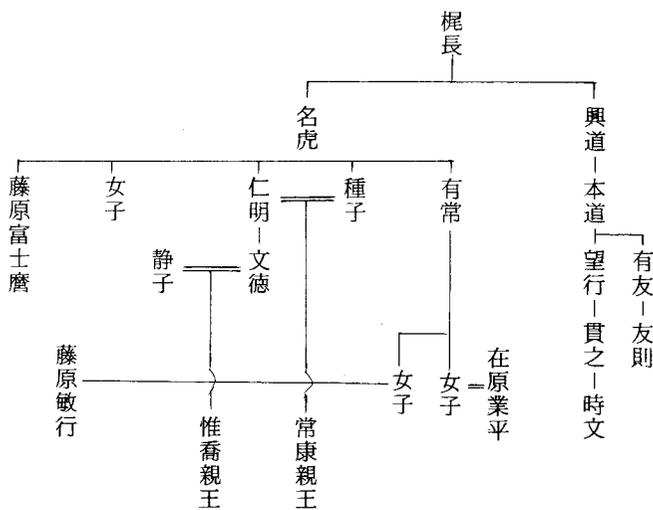
（大阪府枚方市渚元町「渚の院址」写真右）

も又ひとしおのものがあつたに違いない。

この素晴らしい環境の中で、惟喬とは特に親密な関係にあつた在^{あぢろ}原^{のちか}業^{のちか}平^{のちか}や、紀有常（惟喬の伯父）や、貴族や、他の文人達と共に遊^{あそ}獵^りに歌作りに興じた。

阿保親王の子である在原業平（平城天皇の孫）は、紀有常の女を妻としている。父阿保親王も、兄行平も配流の憂き目を経験している。しな

奈良・平安時代の紀氏略系図（その二）



りのある美意識を生きた武宮業平も、高貴な身分でありながら紀氏との繋^{つな}がりのある点では、惟喬と境遇が似ている。二十歳の年下の彼を敬愛して右馬頭^{うまのま}としてよく仕えた心境も理解出来る。そして、

世の中にたえて桜のなかりせば
春の心はのどけからまし

と歌っている。それは、世の中にもし桜が無かったら、桜の花が開くのを今か今かと待ち遠しく思ったり、又、風や雨に散ってしまうのでは、などど気にかかる必要もないので春の心はもつとのんびりするであろうと、悲運の皇子の胸のうちを桜花にたえて詠んだものらしい。

天の川

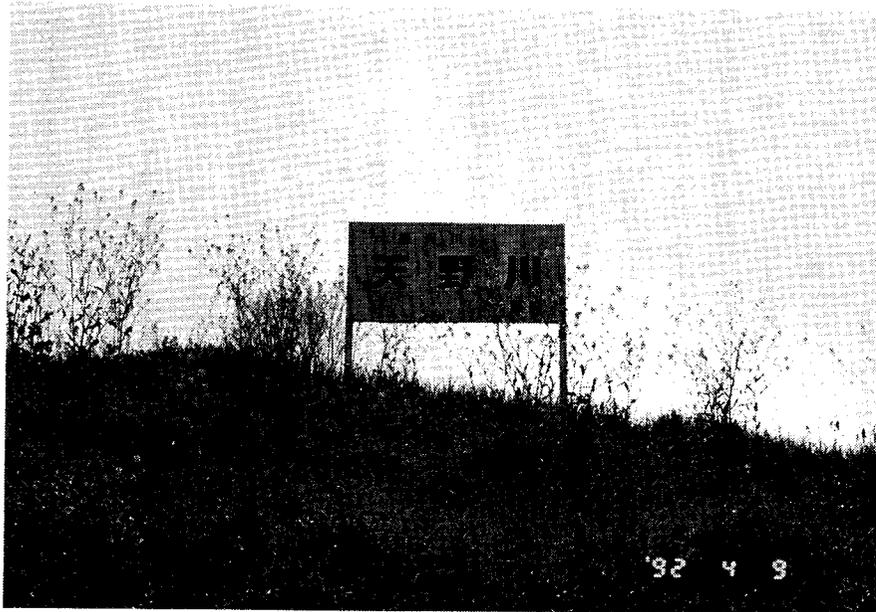
惟喬と業平はそんなわけでもとも気があつたらしく、しばしば近辺の交野ヶ原（現枚方市・交野市）へ遊獵に出かけたり、天の川のほとりで酒宴を開いたり、渚の院で夜明かして月見をしたり、酒を酌み交わして歌を詠んだりした。天の川で惟喬は、

狩りをして天の河原にいたるといふ
心をよみて盃はさせ

と詠むと業平は、

狩り暮らし たなばたつめに宿からむ
天の河原にわれは来にけり

と詠み、



天 野 川

ひととせにひとたび来ます
君待てば宿かす人もあらしと思ふ

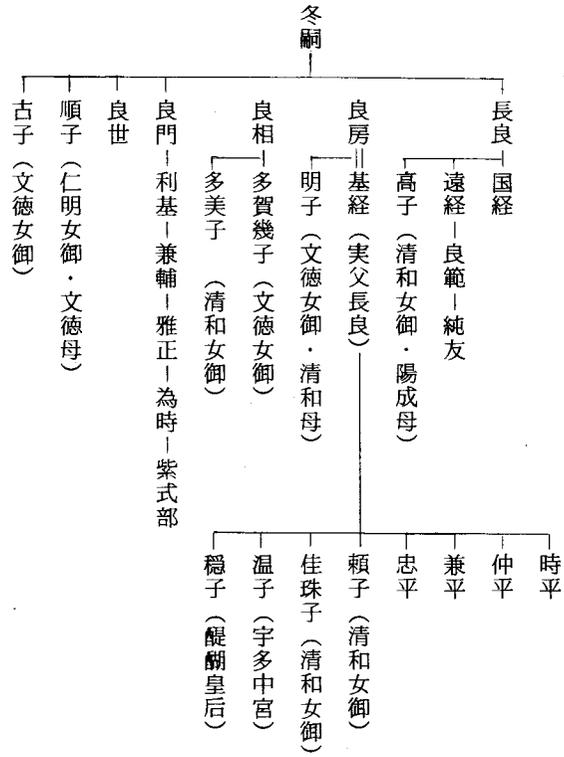
と有常が返し歌を詠んでいる。この夜、院に帰ってから月を見ながら歌遊びに興じた三人のことを『伊勢物語』八二段はくわしく書いている。この天の川には現在、かささぎ橋、禁野橋、天津橋がかかっている。天津橋には、中央のバルコニー部に高さ一六七センチ、幅一二〇センチのアルミ鋳物製の板がとりつけてある。それに光ファイバーを利用して、天の川・牽牛・織姫等を、白・青・赤・緑等さまざまな色のイルミネーションで照らし出し、ロマンチックな世界を醸し出している。当時の惟喬始め業平らが想像もし得なかつた橋に変身している。

禁野

交野ヶ原（現、枚方市・交野市）の近辺一帯を当時は禁野と呼ばれていた。天皇や貴族達の狩猟地で「一般の者入るを禁ずる」の意味である。この地を遊猟地にしたのは、京に近いことと、水辺の丘陵が起伏した風光明媚で、勿論、雉・鴨・鹿・猪が多かつたためである。現在、禁野という地名はそのまま残っている。

鷹狩の起源は五世紀の仁徳朝である。その後、一時廃止されたり、復活したりを繰り返していた。奈良時代までは遊びと考えられていたが、平安時代には武道として盛んになった。交野ヶ原では垣武天皇・嵯峨天皇など一四回も鷹狩りを楽しんでいる。

平安時代の藤原氏の略系図



雉塚

親王がいつものように狩りをして遊んでいられるとき、三つの足を持った白い雉が飛んで来て、どういはずみにかご自分の前で、その命を絶ったのでかわいそうに思い、薬師山の頂上に塚を造って葬ってやったという話がある。

その碑が現在、枚方市禁野町の和田寺にあることを知った。野次馬根性の私はじっとして聞かない。この寺の任職は歴史にくわしい人と聞いていたので、面白い話も聞かしてもらえらるものと楽しみに出かけたが、その日は運悪く東京へ出張とのことで、問題の「三足白雉霊」と刻んだ碑のみ撮って帰って来た。裏の文字は残念ながら判読は難しかった。

安永二年（一七七三）に書かれた『河州交野郡禁野村医王山鎮守雉大明神因由記』によれば、「惟喬親王白雉の霊を祀る。雉大明神の神祠が建てられた」とある。

水無瀬

惟喬は渚の院と殆ど同時くらいに水無瀬に離宮を持ったらしい。夏は京都よりもずっと涼しく、滝もあり、四季を通じての景観も素晴らしい土地であったという。

水無瀬。この地名は古代から、水生野・水成瀬・水無瀬と変えて来た。淀川の流れと歴史の流れとが浮沈を共にして来たのだろう。その理由を私なりに想像してみる。

僧行基が神亀二年（七二五）に山崎津（水無瀬に隣接）に橋を造って

京に居る天皇や貴族達が禁野へ来る時は、鳥羽で乗船し、川を下り楠葉（継体天皇が居られた所）か渚あたりで上陸して交野へ入ったらしい。渚に別業を持っていた惟喬はその点大変便利であったと思う。業平らを連れて鷹狩に颯爽と出かけるガッチリとして長身のハンサムな惟喬の姿を、ひとりで臉に画いてみる私である。犬を走らせ鷹を放つて獲物を追う壮快なスポーツは、皇位継承のことなど、とつづくに念頭を離して存分に楽しませたに違いない。

いる。恐らく度々の洪水に苦しむ農民の姿を見兼ねたのであろう。以後この橋を中心にして色々な事件が起きている。火事あり、秀吉と光秀との戦いあり、洪水のため橋が落ちたり、修復したりで、その都度都度なにかの形で水に異変が起きてこの地名を変えて来たのだろうと思う。

天皇や貴族達はこぞつてこの周辺の地に別業を建てている。天平三年（七三一）には行基が山崎院を建て、万事に派手好みの嵯峨天皇は立派な河陽離宮を弘仁五年（八一四）に建てている。水無瀬も遊猟の土地であり、交野ヶ原の中継地でもあったため頻繁にここを利用している。淳名天皇・光仁天皇も度々この離宮を訪れている。少し時代は下るが、後鳥羽上皇も離宮を建てている。

背後に丘陵が迫り、前面には淀川添いに低湿地が広がり、小動物や野鳥の宝庫とも言えるような狩猟場の水無瀬は、都が平安に移された時を機に別業地として賑わったとも言える。河陽離宮跡は現離宮八幡附近とされ、後鳥羽上皇の離宮跡地もはっきりしているのに、惟喬の宮跡は、京都府乙訓郡大山崎。大阪府三島郡水無瀬らしいとあるのみで、文書にもはっきり出て来ない。

業を煮やした私は自分の足で確かめるしかない、思い切つて現地へ赴いた。大阪駅から阪急電車に乗り換え水無瀬駅へ。さて、降り立つてもどっちへ向いて歩いてよいやら見当もつかない。まず、駐在所に飛び込んだ。

「大阪府立青年の家に歴史に詳しい先生が居られますから」と、丁寧にその位置を教えてくれた。青年の家のY先生は、「跡地の碑は聞いた

ことがありませんよ」と言いながら、「島本町史」その他を繰りながら時間をかけて調べてくれたが……。そして親切に関連事項のみを無料でコピーしてくれた。

ついでに一つ東寄りの大山崎駅にも降りて資料館に立ち寄った。ここは中世に秀吉と光秀が戦った場所であるから、その種の話なら色々の資料があつて調べられるが、こと平安初期となるとなかなかむずかしい。このY先生も、ロビーにある大地図に点灯していろいろ説明してくれた。けれど、嵯峨天皇に関する程度足跡も見えたが、私めが目指す場所は判然としない。業平らといつも行動を共にしていた惟喬は、水無瀬離宮は景色がよいのでここでは専ら歌を詠んで遊び、ほとんど宿泊のみに使っていたのだろう。この頃、山崎橋は騎馬のまま渡ることを禁止していたから、徒歩で渡ったか、それとも舟で淀川を渡り、ちょうど対岸にある渚に上陸し、交野ヶ原に遊猟に出かけたのではないかと思う。

その頃、京都の邸宅はまだそのままであるし、渚には立派な別業があることから、この宮はさして大きいものではなかったかも知れない。だから跡地が判然としないのでは……と自分で結論づける外方法はない。水無瀬で数日一緒に遊んだ業平は、例のように惟喬を京都まで送った。夕方京都の御殿で右馬頭なる業平に酒を振る舞った後、褒美をやらうと言つて、早く自宅へ帰らうと思つている業平をなかなか身辺から離さなかつた。そのお寂しそうな様子が気になつて業平は次の歌を詠んでいる。

枕として草引き結ぶこともせじ
秋の夜とだにたのまれなくに

今は晩春で夜は短い時だから、長い夜のようにゆっくり出来ませんが、
寝ずに一晩中お仕えしましよの意味らしい。

天安二年（八五八）、父文徳を失い、貞観八年（八六六）の二月に生
母紀静子（名虎の女）を失っている。厚い帝寵を受けながらついに一介
の更衣に終わった母静子の運命にも、万斛の涙をそいでであろう。ち
ようどそんな頃ではなかったかと想像する。業平を返したくなかった寂
しさの刻は。

母静子の追善法要をその死後二年、貞観一〇年（八六八）に雲林院で
営んでいる。雲林院には従兄弟にあたる常康親王が当時隠棲していた。

常康の母も紀氏の出で、仁明天皇の更衣、惟喬の母の姉である。

水無瀬神宮（祭神後鳥羽上皇）の社務所で聞いた話によると、その近
くにある粟辻神社が惟喬親王を祀っているというのですぐ行ってみたけ
れど、あまりにもちっちゃな祠で、これはどうも眉唾ものらしいと思っ
た。近くの御所ヶ池は惟喬の御所から生まれたものだと言ってくれたが、
私はこれも信用していない。

小野の里

貞観一四年（八七二）二月、上野守に任せられ、七月には四品彈正尹
で、病気のため俄かに剃髪して出家。そして比叡山の西麓である小野の

里に陰棲した。法名を素寛といった。惟喬時に二九歳であった。その地
名から、小野宮とも呼ばれていた。

貞観一六年（八七四）九月、清和天皇が惟喬に封戸百戸を増額して衣
鉢の費（生活費）に当てさせる勅令を出している。これは、皇太子争い
に勝って皇位を継承したから、気がひけたため償いをしたものと思う。
けれども惟喬はこれをきっぱり辞退している。清和天皇は又あらためて
封戸を受けるように勅令を出しているが、その結果は明らかでない。

右馬頭であった業平はある年の冬、雪を踏み分け踏み分けしながら、
やっとの思いでこの小野の里を訪れた。何年かぶりに惟喬に会うのであ
る。静かな山里で親王は寂しそうなもの悲しい様子であったとか。恐ら
く死期が近付いていた頃だったのだろう。

忘れては夢かとおもふ思ふきや

雪ふみわけて君を見んとは

と詠んで号泣したとある。惟喬の返し歌は、

夢かとも何か思はむ

うき世をばそむかざりけむほどぞくやしき

あなたは夢ではないかと言っているが、驚くにはあたらない、今では私
はもっと早く出家したらよかったと悔いているよ、という意味。

渚の院や水無瀬で過ごした楽しい想い出話に華を咲かせたらしいが、

そのときの惟喬の気持ちとしては、温かい慈母の懷に抱かれたような安らかなひとときではなかったかなと思う。楽しい刻を過ごしているうちに夕暮れになってしまう。公事のある業平は帰らねばならない。二人にとっては肺腑をえぐられるような苦しい悲しい別れであったに違いない。

二九歳で出家してこの地に陰棲して、寛平九年（八九七）五四歳で亡くなるが、惟喬にとってどんなに寂しくて悲しい土地であっただろうと、その心境を推し量ってみる時、なにか胸衝かれる想いがある。

京都府の地図を広げてみると、小野という地名は沢山ある。いろいろの資料を調べていくうちに、惟喬が陰棲していた小野は、どうやら現在墓所のある京都市左京区大原上野町亀甲谷の辺りではないかと勝手に結論づけた。

どうしても一度その墓に参りたくて、八瀬大原行きのバスに乗った。野村分かれのバス停を降りた時は、天気予報通りもうドシャ降りであった。その上傘も飛びそうな風。足許は忽ちずぶ濡れになった。さて、亀甲谷に入る道が分からない。向こうの方に大きい一軒家を見つけて走った。そしてその軒へ飛び込んだ。ベルを二三回押したが応答はない。しばらく憎い雨足を見つめながら不安な刻を過ごしていると、いきなり玄関の戸が開き、

「なんだか人さんの気配がして、うちにお出やしたお人かと思うて。わたし今起きたんどっせ。一人暮らしいうもんは吞気どっしゃろ」と、真新しい割烹着の似合う上品な女性が顔を出した。さりげなく時計

を見ると、十一時を指していた。目指す親王の墓を聞くと、親切丁寧に教えてくれた。

「四月半ばいうのに、今日はきつう寒うおすなあ。雨が上がるまで中へお入りやして掛けてお待ちやしたらどうどす。見たとおりの汚い所どっさかい遠慮はおへんえ」

言葉に甘え、中へ入らせてもらっているいろいろ話しているうちに、年齢は八六歳、娘夫婦が山科に居ること、この家には五〇年も住んでいること等が分かった。とりとめもない事を話しているうちに雨はいよいよやがら上がった。お礼をいって暇を告げると、

「遠くからお出やしてお疲れどっしゃろ。お帰りにもう一遍寄っておくれやす。熱いおぶなど入れまっさかい。身体を温めてお帰りやす。ほんまに。なああんさん」

この老婆の暖かい京言葉には、京のぶぶ漬けは絶対になかったとも信じている。

四月でこの寒さ。業平が雪の中を訪れた時の比較おろしはどんなに寒かっただろう。

墓所の石段は相当高く、宮内庁の制礼は遙か上である。上り口の側にある山椿の赤が心なしかうるんで見えたのは強ち雨のせいだけではなかったと思う。その一段一段に足跡を刻みつけるように登った。ところどころに杉の実が落ちていてソツと拾わずにはおれなかった。行き届いた掃除は私をホッとさせたが、詣でる人もあまりなさそうな五輪塔が、何故か寂しそうに感じられてならなかった。立ち去り難い想いで墓の下に

(京都市山科区小野、惟喬親王の五輪塔 写真左)



眼をやると、真下は割合広く平坦な美しい土地であった。ひよっとすると、この場所に御所があったのではないだろうか、ひとり想像逞しゅうしてみた。その真下にとても美しい北山杉が見えた。まるで緑のしとねから天を衝くような木がいきなりニョッキと生まれたようで、こんな行儀のよい植林を見たのは始めてだった。よほど几帳面な人の仕事だろうと嬉しく思った。私は躊躇なくこれを惟喬杉と名付けた。

(惟喬杉 写真左)



杉林越しに広がるひなびた大原の里は、雨のせいもあってまるで寝ているような静けさであった。雨に煙る遙か向こうの連山が、まるで墨絵のようなたたずまいを見せて、旅先の私の心を和ませた。親王もこの素晴らしい景色にどれだけ心を慰められたことだろう。ずっと北の方に眼を移すと、金毘羅山と翠黛山が見えた。ふと建礼門院の日日にまで思いを馳せたひとときであった。

君ヶ畑

滋賀県永源寺町君ヶ畑には、惟喬に関する大きい伝説がある。

惟仁親王に皇位を譲ってから惟喬は世の無常を感じ、菩提の道に入るべく廷臣を連れてこの地の奥山の小松畑という所に住みついた。この山中には大木が多いので、杣人まきびとに器の木地を伐らせて轆轤うろこを発明され、盆・椀等の作り方を教えられたという。これが小椋六ヶ畑に住む木地師達の祖神と崇められた親王にまつわる伝説の骨子であるそう。非農耕民集団に多い権威仮託のための伝承ではないかと思う。そう思いながらもこの地の伝説もしっかり手繰り寄せたい気持ちで、またぞろ君ヶ畑を訪れることに決めた（平成四年五月）。

永源寺町の東北に位置するこの君ヶ畑には、永源寺役場前からバスは一日一往復のみ（現在は四往復）と聞いて、「コリヤ駄目」と諦め、息子の一日を束縛することに決めた。

左に永源寺ダムの吸い寄せられるような美しい水の色を愛で、右に鈴鹿山脈（西麓）の天を衝くばかりの樹々を見上げ、藁屋根の多さに驚きつつも心を和ませ、後部座席の眼はドライブ気分満点であった。途中、政所まんじょうという地名を見つけ、ここが茶の産地で有名な土地だと周辺の茶畑を見回した。守口市から二時間半ばかりで蛭谷に着いた。そこには惟喬を祀る筒井神社があり、境内に木地師資料館があった。管理人が留守で観ることはかなわなかったが、全国の木地師（一五〇人）がここに詣でて自分の自慢の作品を置いてゆくことを知った。盆・椀・こけし等の他に、木の薬研やげんまで寄贈してあるとか。



（惟喬親王尊像 写真右）

御池川に沿って、更にクネクネと曲りくねった山道を西南に走ること一五分。目当ての惟喬の墓所。素晴らしく大きい明神鳥居の側に、これまた大きい石碑があり、それには、

〃惟喬親王御廟所筒井八幡宮日本国中轆轤師等鎮守〃とあった。

その反対側に、惟喬親王の大きい座像があつて驚いた。『國史大辞典』に載っている親王像より遥かに美男子であつたので、私めの喜ぶまいとか。

禁令の簡条を記したあの制札には宮内庁の文字はなく、滋賀県神社庁とあった。菊の御紋と桐の御紋のついた石の門扉の向こうに立派な宝篋印塔が鎮座していた。その昔大勢の木地師達がここに集うて仕事していたという。千軒跡の碑もあり、御所の跡地にはこぢんまりとした銅板屋根の神社があったが、これは蛭谷にあった筒井神社の岐れかなと思った。伝説は私の中からとうに追いやられて、冷え冷えとした山の空気に、平安初期を蘇らせた想いであった。

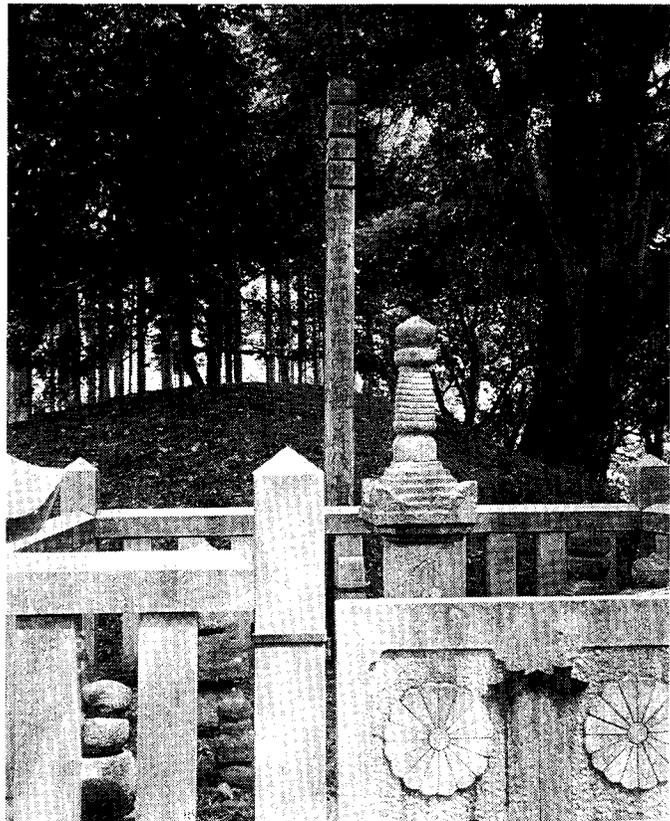
蛭谷から東北に二〇分ほどの位置に君ヶ畑がある。車を止めると三人の子供が走り寄って来て「どこへ来たん」と聞く。来客の珍しい土地らしい。指さした校舎は割合大きく美しかった。現在全校生徒数たったの五人だという。そのうち四人は小椋姓、一人は瀬戸姓。後で役場に聞いたところによると、三六戸内十一戸が小椋姓であった。頼んだわけではないが、親切な三人の子供はゾロゾロと道案内役を買ってくれた。

大皇器地祖神社の杉の大木が先日の台風で半分折れたこと、茶臼をはさんだ北側に清和天皇の勅令による宝篋印塔があること。その向こうに高松御所と呼ばれている金龍寺がある事等を説明してくれた。そして子供達は惟喬のことを「親王さん、親王さん」と言っていた。

宝篋印塔は小高いところであって、側には侍臣のものか小さい五輪塔が四つあった。

金龍寺は平素任職はここに住まず、周辺の人達が留守居役を買っていて、当日はぐるりの草取りをしていた。この寺で、私は由緒書めいた古文書を手入することが出来たので以下紹介する。

(滋賀県永源寺町君ヶ畑、惟喬親王の宝篋印塔 写真左)

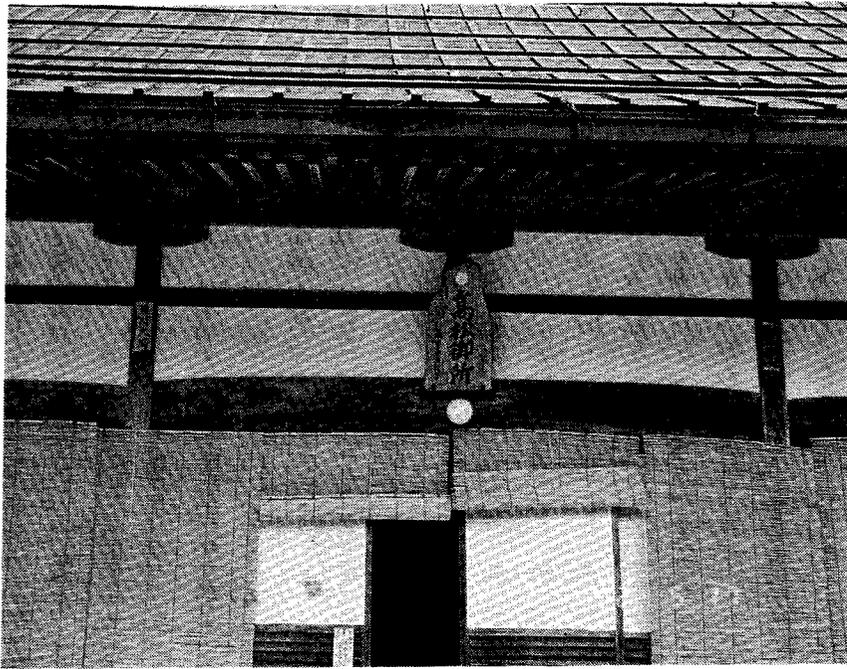


木椀元祖惟喬親王の神号は大皇大明神。

帝位に望みをなくされて、山水を愛してばんやり暮らしたいと出家された。小野の里に入らせ給いし後に当国小松ヶ畠に入御された。御名を算延(一名素覚)と改め小野宮、水無瀬宮と称し奉った。御詠歌に

世をいとう愛智の深山の呼子鳥

ふかき心をたれか知るらん



君ヶ畑 高松御所

自分のこれからの住居をここに決めようと言われたので、柴の庵の御殿を建てて藏皇殿と名付けた。当地では高松の宮と崇めた。そこで、邑の名を君ヶ畑と改め、郷を小椋と言った。清和天皇は親王へ御領地を附。詔して大皇大名神と送り名をされた。

ある時、木の実が落ちてその抜殻が器に似ているのを見られふと思いつかれた。そこで、大木を切つて来るように近臣に命じられた。柚人は天狗ヶ谷（君ヶ畑の北東で鈴鹿山脈のど真ん中）に入り、大きい椋の木を切つて差し上げたところ、親王は轆轤を發明され、侍臣と土地の者に、その轆轤を使いながら椋器の作り方を教示した。その御教示に従つて丁寧な木地椋を作り上げてお目かけると大変喜ばれて、その兩人に木地椋作りの長たるべき系図を与えた。一人は小椋信濃守久長。又一人は小椋伯耆守藤原光吉と名付けて御印書を下された。それよりこの地は木地椋器祖神の霊場となった。

元慶三年（八七九）鹿鳴き紅葉散りゆく様をご覧になって、急に悟りを開かれ、十一月九日侍臣を呼ばれ、「入寂はこの地に定めた故、たとえ今日より後余命があつても、今日のこの日を自分の命日とせよ」と言われたので、民部卿は京に上り、その事を清和天皇に奏上した。天皇は大変名残りを惜しまれて、急いで立派な社を建てて、白雲山と号し、遷宮し奉るべしと命じられた。

寛平九年（八九七）二月二十日、五四歳にて薨去された。清和天皇は勅使を以て宝塔を賜い、御廟の山を塔影山と改めさせ勅願寺御菩提寺等を定められた。光仙山専皇院、無量山般若院を建て、藏皇殿を改めて藏皇殿金龍寺と改名された。それより、一月三日・三月三日・四月九日・五月三日・六月十五日・九月七日・十一月九日、一年に七度神事を行いお祭りしている。

むつかしい文字を要約してみると、大体こんなことが書いてあった。こうして踏み込んでゆくうちに、あながち伝説ばかりではないような気もしだした。

流亡伝説

交野ヶ原での遊獵の回数が多いだけに、枚方市には影見池・茄子作・



君ヶ畑 筒井神社

山長松山・鷹塚山等、地名にまで残っている伝説も多い。また、三重県員弁郡にも伝説がだんごにかたまって残っている。滋賀県のさきの君ヶ畑を行在所あまぎよにして、三重県度会郡河内村広の御所で薨じられたというのもある。国内各地を調べると伝説の数は枚挙にいとまがない。ご不幸であつた御霊を慰めたいと思う多数のファンが、かくあれかしと願つてこうした伝説を作り上げたのであろう。親王の優しい色かげは即ち、伝説を作り上げた里人達の美しいころ根であつたかも知れない。

惟喬は終生四品である。何一つ実務を与えられず、親王中一番年上でありながら、末席にいた辛さには、耐え難いものがあつたと思う。父文徳が始め、皇太子にと思つていたほどの聡明な皇子であつただけに、三十歳に手の届く年齢になつて、なおそうした屈辱に耐えるのは苦しかったと思う。藤原氏と紀氏との勢力の違いから、その渦中で一生を翻弄された惟喬の口惜しさは理解出来るような気がする。清和からの「封戸百戸」を断り続けた姿勢の中からは男の意地みたいなものが見え隠れして誠に深い。

なお、どの資料からも、彼の周辺の女性の話が全然出てこない。そのことが不思議でもあり、また余計哀れを誘うのである。終焉の土地小野の里（大原）に今は静かに眠れかしと祈るのみである。

始めは想像のよすがが……でもと軽い気持ちで調べ始め、そのうちどんどん夢中になつていくうちに深みにはまり、最後には、いっそペンにしてみようかと大それた気持ちに移つてゆく、そんな自分の心の動きに今は呆れている。まるでイブ・モンタンの「恐怖の報酬」のように。